

海軍省

上海事變勃發後に於ける支那各地狀況

昭和七年三月

(以印刷代謄寫)



0005180000

0005180-000

631-250

上海事變勃發後に於ける支那各地狀況

海軍省・編

海軍省

昭和7

ABC

上海事變勃發後に於ける支那各地狀況

上海事件勃發以來支那各地の漢字新聞は、戰闘の經過に就き支那一流の虛構妄誕、或は捏造し或は誇張せる記事を以て、支那軍の大勝利を報道し、更に種々の逆宣傳を以て煽動する處あり、無智蒙昧の支那民衆は、此虚報を妄信し宣傳に乘り支那軍の勝利を確信し、或は盛大なる戰勝祝賀會を催し、或は恤兵金を募集する等戰勝氣分隨所に溢漲し、從て在留邦人に對しては漸次輕侮的態度を露骨に表はすに至れり。然れども各地共支那官憲の取締嚴重なる爲、幸ひ事故の發生を見ざりしも一般に各地共次第に不穏の兆あるを認め、海軍警備力の及ばざる土地は居留民を引揚げ避難せしめ、其の他に於ても引揚準備を完成して不時の急變に備へたるもの多數に及べり。二月末迄の各地一般狀況概ね次の如し。

(追記) 三月初旬上海に於ける十九路軍の敗退各地に知れ渡りたる爲戰勝氣分は減ぜるも邦人に対する憎惡の念は深刻となり排日毎日の感情一層昂まりしが如し。

一、北支方面

上海事件に對し種々捏造虛妄の報道漢字新聞紙上に顯はれ、逆宣傳行はれ居るも各地共一般に平穏なり。

二、揚子江方面

鎮江

滬寧鐵道の沿線に在りて、上海南京兩市に近く交通頻繁なり。更に南京より上海方面へ汽車輸送に依る派兵は悉く鎮江を通過し、市民は一々之を眼前に見る關係もありて、上海事件發生後は流言蜚語盛となり、虛報誇張報導の行はるゝ事、支那各地と異ならず。市内民心漸次激化せるを以て、二月二日在留邦人全部を警備驅逐艦に收容し同艦長より公安局に對し

(イ) 邦人財産の保護

(ロ) 附近軍隊及砲臺は日本軍艦商船に對し事端を起さざる様特に慎重なるべきこと

(ハ) 邦人の生糧品購買に便宜を與ふること

等を要求せしが、二月五日南京領事より邦人引揚の發令あり、翌六日邦人は四名を残して他は引揚げ下航す。

(鎮江は南京駐在帝國領事官管轄區域なり)

二月十日午前十一時三十分頃、支那兵數名「ハルク」前の巡警の制止を肯かず日清汽船「ハルク」に侵入し掲揚しある我國旗を降下し不穏の態度を示せり。

急報に接して公安局長急行し來り之を制止して暴兵を退却せしめ、國旗を再び掲揚せり。公安局長代理は直に警備驅逐艦に來艦陳謝し、將來嚴重に取締る旨誓言せるも尙同日午後憲兵司令に對し

(イ) 犯行者の處罰

(ロ) 所屬隊長の正式陳謝

(ハ) 今後の保證

の三項を要求なしたるに、十二日公安局長、警備驅逐艦に來訪し

(イ) 局長自身正式陳謝遺憾の意を表し

(ロ) 本事件の陳謝及今後の取締は軍憲と共同し特に嚴にする旨の正式書状を提出し

(ハ) 本事件は性質上局長にて全責任を負ふべく保安隊長の責任は少き旨再三陳謝したる上

(ニ) 保安隊長も其の責を分擔すべしとする我主張に従ひ正式陳謝状提出に盡力すべき旨

を言明し事件解決に誠意を示せり。

二月十四日省政府當局の國旗引卸事件に對する正式陳謝、將來の保證状提出あり、本事件は完全に解決せるも、一般民心次第に悪化の度を高め、同日交渉の爲公安局に赴きたる警備驅逐艦乗組士官及通譯は、往路は支那巡警附添へる爲無事なりしも、其

歸途午後四時頃、日清汽船「ハルク」附近にて約三百の群集に包囲暴行を受け、群集は支那巡警辛じて追ひ散らしたるも通譯は遂に輕傷を負ふに至れり。

右に關し公安局長は同夜警備驅逐艦に艦長を訪れ、種々陳謝したる上翌十五日省政府委員及外交部員を伴ひ再び來艦し

(イ) 省政府より正式陳謝狀提出

(ロ) 犯人を處罰に處す

(ハ) 公安局長を處罰し當該分局長を免職す

(ニ) 今後の邦人保護に對する保證

(ホ) 一切の排日行爲を嚴禁す

(ヘ) 慰籍料四、五〇〇圓を提出す

の條件にて解決せり。

上海事件發生後、上海蘇州方面よりの避難民多數入市し、民心の動搖止まざるを以て省政府は二月十五日戒嚴令を發布し、且つ邦人其の他外人に對する行動を慎重にして

べき布告を出し、市中には巡察隊絶えず巡邏する等警戒嚴を極め、排日傳單も其の影を潜め市内稍平穏となれり。

十八日省政府は警備驅逐艦長宛排日行爲禁止に關する書面を送附し來れり。

鎮江通過の上海への増兵列車次第に其數を増せども目下の處先づ平穏無事なり。

南京

一月廿一日南京の支那新聞各紙は、「上海日本人の大暴動」等の大見出を付し、「二月前二時半四、五十名の日本浪人は日本陸戰隊と共に装甲自動車四臺にて三友實業社に赴き、新聞紙にガソリンを注ぎ火を放ち、同社の建物六室機械二十四臺を焼き、約一萬元の損害を與へたる」旨、並に「同日午後居留民大會より退出せる六百餘の日本人は、短刀又は鐵砲を携へ北四川路を練り廻り支那人を殲にせよと叫びつゝ、途中支那人を見れば殴打し且支那商店五、六軒を破壊せる」旨を報道する處あり。

南京政府に於ては上海に於ける紛糾の當地に波及するを極度に虞れ、市中の警戒を特に嚴重にせり。

一月廿五日の支那新聞は「日本陸戰隊は閩北及南市兵工廠、市黨部、市政府等を占領する準備成れりと聲明せる」旨の上海電報を掲載す。

一月廿七日支那新聞紙上に、上海民國日報の「上海の形勢緊張せるを以て停刊ありたしとの工部局參事會の勸告に従ひ即日停刊せる」旨廣告あり。

(上海民國日報は一月九日の不敬記事掲載により廿六日工部局の手にて閉鎖せられしものなり)
首都各界抗日會、工界抗日會及留日同學抗日會等は二十七日夫々會議を開き

- (一) 抗日團體解散に絶對反對
- (二) 上海市政府の日本側要求承諾に反對
- (三) 聯盟規約第十五條第十六條の適用要求
- (四) 京滬各地に大兵を配置して正當防衛をなすこと等を中央に請願することを決議せり。

廿八日の各新聞紙は上海の形勢逼迫し、一觸即發の徵ありと報じ、又南京日本領事館は廿七日軍艦に引揚げたりと虛報して一般に少からず衝動を與へたるが、支那當局

の警戒は一層嚴重となり、市民が城内より荷物を搬出することを禁じ人心の動搖を防ぐに至れり。

二十九日の支那新聞紙に依れば、汪精衛は二十八日の政治會議に於て對日絶交問題に關し大要次の如く報告せりと

「對日方針は昨年十月上海に於て原則を決定せるが、新政府成立後予を上海に見舞へる各同志は對日絶交問題には言及するものなかりき。本月十七日予が杭州にて蒋介石に會見せる際、張繼、張人傑、何應欽も同席し、孫科も來り十八日晚蒋介石が對外問題に關し奉化に於てなせる演説を述べ、且つ一致協力に依り政府の實力を増大し、始めて外國に對し得べき旨を説明せる當時多數の同志は、右は上海に於て決定せる原則に反せざるものと思考し賛成せり、尤も外交問題に關しては予は其の席、上孫科に對し、行政院の方針は決定せるや否やを尋ねたる處、孫は未だ決定せずと答へたるに付予は更に陳友仁は自己の絶交主張を飽く迄堅持せんとするものなりやと尋ねたる處、孫は然らずと答へたり、本日出席の各同志は二十一、二十二兩日蔣

介石及予が勵志社に於て、中央各委員と談話會を開きたる際陳友仁は絶交問題を提出せるに付、陳銘樞は單に平和に達する爲に絶交することは恐らく妥當ならざるべく賛成し難しと述べたる處、陳友仁は對日絶交宣布後全軍隊を共産黨討伐の爲江西に移動し、日本に對しては開戦せざることを示せば和平解決の目的を達し得べしと説明せり、之に對し張繼は陳友仁の主張は兩者矛盾せざるや、絶交して宣戰せざる位ならば絶交の要なく軍隊を移駐せしむべき謂れ更に無しと述べたり、當時各同志は陳友仁の主張に疑問を挾み、予も上海に於て決定せる原則を變更せんとするものならば更に詳細研究したる上ならでは確たる意志表示を爲し得ずと述べたるものなるが今に至り陳友仁が蒋介石一人反対せりと云ふは當らず、條約の締結媾和宣戰等に關しては立法院の決議も要する次第なれば、行政院中の一部長が全黨全政府の名儀を以て外交の大計を執行せんとするものとせば個人の獨裁にあらずして何ぞや、況や行政院自體が未だ決定せざる場合に於て殊に然り云々」

尙陳銘樞は右汪の報告後、「自分の知る限り絶交問題は未だ行政院の決議を得たるこ

となく、又行政院長は辭職し副院長は事前に知る所なき」旨述べたりと。

二十九日の支那紙は「日本軍閏北に侵入せるに付十九路軍は已むを得ず應戦し、目下兩軍激戦中なる」旨特報せり。右の報道は逸早く支那側各機關に到着し、少からず衝動を與へたる模様なり。

今日邦人官民全部日清汽船雲陽丸に避難す。

三十日に到りて支那新聞は「支那軍は連戦連勝し二十九日北四川路に在りし日本陸戰隊本部を占領し、日本軍タンク車三臺を鹹獲し、又吳淞砲臺は二十七隻の日本軍艦より包囲攻撃を受けたるも三十一發の反撃を加へ三隻を擊沈せしめたり」等彼我顛倒の虛報を滿載し、又十九路軍長蔡廷楷は「日本飛行機母艦が直に退去せざれば支那側は停戦に應ぜず日本軍を排撃するのみ」と稱し居る旨報道し、且同人の寫真を掲載する等大に對日氣勢を煽れり。

尙支那外交部は同日の新聞に大要左の如き聲明を發表せり。

「上海市長は二十八日午後日本總領事の滿足と認めたる回答を爲せるに拘はらず一

遣司令官は突如支那軍の撤退を要求し同時に支那軍隊に對し先づ機關銃を以て襲撃し二十九日に至るも止まず且二十餘臺の飛行機を以て人家稠密なる閏北を無差別に爆撃し火災を起さしめ人民の死傷極めて多く支那側行政交通文化の各機關及主要商店の多くは破壊せられ現に上海は猛烈なる砲火の下に在り支那當局は此形勢に處する爲自衛手段を執り日本軍の攻撃に對しては頑強に抵抗を繼續すべし日本の上海侵入は明に國際公約、不戰條約、九國條約及聯盟決議案に反し殊に人家稠密なる商港を爆撃するは人道の許さざる處にして各國人民の生命財産亦重大なる危害を受け各國の通商は之が爲杜絶の虞ある處此種の責任は完全に日本側に於て負ふべきものとす上海は支那の經濟商業上の中心にして首都に近きを以て上海の攻撃は直に首都に對し直接の危害及脅威を與ふるものなり日本は現に軍事侵略を擴大し支那の各地は隨時重大危險を發生しつゝあり依て前記條約締結國に對し各國は其の條約上の神聖なる義務を履行し人道公理及公法の爲日本の暴力をして破壊し盡さしめざる様强硬なる處置を執らんことを要請す」

三十日支那國民政府は左の宣言を發表して首都を洛陽に移すを宣し蔣介石、汪精衛、林森等即日南京發北上せり。

「日本の東北侵略以來政府は九國條約聯盟規約及不戰條約の精神を尊重し隱忍自重各締約國の公理維持を待つと共に一面軍隊に嚴令し全力を以て地方を經營し人民の生命財産の安全を保障し苦心すること數ヶ月を経たるが日本の進出は止まず最近多數の軍艦を上海に派遣し陸空軍を輸送し市民の反日行爲に籍口し暴力を以て恫喝せんとするに人民が團體を組織し國難に赴かんとするは素より愛國の熱誠に出づるものにして苟も越軌行爲なくば政府として干涉を加ふるに由なし併も政府は戰禍を免るゝ爲一再ならず日本の要求を容れ民衆の抗日言論行爲にして多少なりとも過激に亘るものは等しく禁止して以て各種の民衆團體を諭し自發的に抗日の名儀を取消さしめ以て強隣の口實を絶てり本月廿八日上海市長は日本總領事の満足とする回答を與へたるに拘らず同夜一遣司令官は突如上海駐屯軍の撤退を要求し拒絶せらるや直に攻撃を開始し無制限なる爆撃に出で人民の生命財産に大なる損害を與へたるが

同時に首都及長江各地に於て日本軍艦は挑戦し居れり右は日本側が政府を威嚇して屈服せしめんとするものなるが政府は國家の人格を保持し國際信義を尊重し武力に屈することなく既定の方針を堅持する外一面軍隊を督勵して自衛を計り寸尺の土地も決して譲らざると共に外交手段を講じ各國に對し條約上の責任履行を要求すべし政府は日本の暴行に對し正當防衛の権利と義務を有することを確信すると共に各國も亦世界の平和及國際信義を維持する爲必ずや坐視し得ざるべきを確信す政府は自由に主權を行使し暴力の脅迫を受けざらん爲洛陽に移駐執務することに決定せり」三十一日の支那新聞は、南京政府外交部は一月三十日國際聯盟及九國條約締結國に對し、右の政府宣言の要旨を述べたる後「各國は該條約の神聖なる責任に基き、既に有効なる手段を取り、日本の支那に於ける一切の軍事行動及該條約違反となる其の他の一切の行爲を嚴正に制止し、以て條約の尊嚴並に極東の平和を維持あり度」申入れたる旨記載せり。

南京政府外交部長羅文幹は同日の新聞紙上に「政府は今後更に日本軍が支那の領土

を侵撃するに於ては能く限り正當防衛に出づることに決定せる旨、及日下日支兩國民間の友誼關係を回復せんとせば日本政府は武力壓迫以外の手段を執る必要あり」と聲明し、蒋介石は全國將士に對し「民族生存の爲將又革命的責任を盡くす爲此の際寧ろ玉碎の決心を以て平和を破壊し信義を無視する暴日と相見ゆべし」との通電を發出せり。

南京政府の洛陽移轉我警備艦船の入港等により、南京市内には流言蜚語盛に流布し人心動搖、今にも日本軍艦の南京砲撃の行はるゝが如き謠言行はれ、同時に反日感情も高調し、一月卅一日には學生數萬軍政部に赴き、對日宣戰を請願し市中には「倭奴を塵にせよ」と大書せる反日ポスター貼出され、日本人雇傭支那人の壓迫、我海軍に糧食を供給し居る支那商店への襲撃暴行等の事故を發生せり。

上海事件發生後南京に於ては、砲臺を増築し城門附近及浦口側江岸に塹壕を堀り、野砲陣地を構築する等對日防備工事を進むるに依り、我海軍駐在武官は首都憲兵司令官に對し、民衆の取締を警告し、尙反動分子の策動等に依りて砲臺より我軍艦を射擊

するが如き事なき様注意する處ありたるに、二月一日午後十一時下關日清汽船「ハルク」警戒中の我警戒兵は突如不法にも支那正規兵の射擊を受け、之と同時に獅子山砲臺より三發の砲撃を受け、重傷一、輕傷一を出すに至れるを以て、警泊中の我巡洋艦は鎮壓自衛上已むなく之に反撃を加へ、南京城抱門附近の丘陵及江岸を砲撃し正子「ハルク」警戒隊を收容せり。

翌二日我領事より右砲撃事件に關し左記覺書を交付せり。

「南京下關日清「ハルク」警戒中の帝國海軍は本月一日午後十一時突如不法にも中國正規軍より攻撃せられ之と同時に獅子山砲臺より三發の砲撃を受け重傷者一名、輕傷者一名を出すに至れるを以て帝國海軍は自衛上已むなく之に反撃を加へたる處中國側は間もなく沈黙せるを以て帝國海軍に於ても間もなく反撃を中止し攻撃に依る損害を最少限度に止むるに努めたり。

查するに日本公使館に於ては最近上海方面に於ける事態の悪化に鑑み在南京帝國領事及館員並に在留邦人を全部下關日清「ハルク」に避難せしむると同時に在南京

帝國領事をして中國各關係機關に對し累次慎重措置方警告せしめ置きたるに拘らず中國側が突如本件の如き挑戦的手段に出でたるは甚だ不都合と云ふべし依て帝國公使館は茲に不取敢國民政府外交部に對し嚴重抗議を提出すると共に本件に關する帝國政府の正當なる要求の權利を保留する事を聲明す」

右抗議に關し外交部より公使宛二日附覺書を以て大要左の如く申越せり。

「今回日本軍艦が聯盟の決議九國條約及不戰條約を顧ず故なくして發砲し獅子山、下關停車場、清涼山、幕府山、北極閣等に命中せしが且機銃小銃を發射せるは實に故意に挑戦せるものとす貴方覺書に於て中國正規軍及獅子山砲臺の發砲を誣ふるも右は事實にあらず查するに中國政府は國際公約及聯盟の事態を擴大すべからずとの決議に従ひ南京城外には正規兵軍を派駐したる事なく又獅子山砲臺には命令なき限り發砲を許さざる事を嚴命しあり從て先づ中國正規軍の攻撃を受けたりとの一説は全く事實にあらず日本軍艦が發砲せる際同砲臺は終始反撃を加へざりし趣にして該砲臺が先づ發砲せりとの點も事實にあらず日本軍艦の不法行爲に對しては前に嚴重

抗議を提出し日本軍艦をして再び事端を發生せしめざる様要求す」

右砲擊事件は其後折衝の結果、支那側は公式には其の非を認むる迄に至らざるも、事態の擴大を虞れて我要求を承認し、

(一) 浦口駐屯軍を撤退し

(二) 從來日清汽船「ハルク」前廣前には煉瓦鐵管等の堆積しありて不逞の徒の窟強の隠れ場となり居りしを整理して見透し易くすると共に巡警及憲兵の多數を配置して自動車以外の通行を禁じ嚴重警戒し

(三) 食料品の供給、日本人雇傭支那人に對する特別保護、電信郵便物の正確なる發受の保證

等をなし更に好意を示す爲自發的に

(一) 日支官憲間に直通電話の架設

(二) 外交部員、憲兵隊員の毎日來訪聯絡

等を始め雜務迄斡旋便利を計り密接の聯絡によりて只管南京の治安維持に努む。

支那新聞の虚報に依る宣傳は依然として繼續し、二月六日の各新聞は「吳淞砲臺の守備堅固にして更に日本軍艦二隻を擊破し四臺の支那飛行機は四十餘臺の日本飛行機に應戦し二臺に損害を與へ又江灣路に於ては大捷を博せる旨、並に鹽澤司令官は敗戦の責を負ひ割腹し日本軍艦十九隻は失走し、又東京の民衆は支那より送還せらるゝ戰死者の遺骨少なからざるを見て暴動を起し陸軍及海軍大臣は自殺せり」等到底想像しえざる虛報を掲げて悪宣傳に努む。

二月一日夜の砲擊事件以來南京市民は極度の不安に襲はれ、浦口、鎮江、杭州方面に避難するもの陸續として長蛇を爲し、城内商店は盡く閉鎖し人影を認めざる程なりしが彼我交渉の解決の結果各種の人心緩和策を施し、支那側にて新聞又は布告に依り日本に他意なきを宣傳せる爲人心次第に安定、商店も大半開店し二月五、六日頃には市内の狀況平常と大差なきに至れり。

二月一夜事件に依り重傷を負へる我水兵は三日午後遂に死亡せるに依り四日南京對岸浦口側に於て支那海軍部、憲兵司令部等の斡旋に依り荼毘に附せり。

南京在留米人中婦女子は同國領事の勸告により六日以來續々上海方面に避難を開始せるも在留英人は依然殘留す。

二月十一日の我紀元節に當りては、南京碇泊の支那軍艦も滿艦飾を施行して敬意を表せるも、陸上砲臺は砲口を一齊に我警備艦に指向し更に城内高地には野砲數門を新に据付けたるを見、十三日には南京市黨部は各界代表者約九百者を召集し對日對策として

- (一) 中央より至急大軍を上海に移動すること
- (二) 聯盟規約第十五條第十六條の適用方聯盟に要求すること
- (三) 政府は自發的に日本租界及日支間一切の不平等條約を取消すこと
- を決議せり。

二月十四日國民政府外交部は英米兩國公使に對し、日本軍の租界制止方に關し「十四日本軍一萬數千名、租界内棧橋に上陸し十五日も同様到着する筈の處、共同租界當局は依然日本軍が租界を根據地として支那軍を攻撃することを放任し居るに付、今

後支那軍隊の正當防衛に依り租界内に生命財産上の損害發生することあるとも支那政府は何等之が責任を負はざる」旨重ねて申入れたる趣なり。

我陸軍の上海上陸以來は支那新聞の戰勝宣傳あるに拘らず、一般支那人は不安を感ずる如く又市内より長江上流への避難民英國汽船民船に殺到し更に陸上の防衛設備を嚴にせり。

我師團長の支那軍撤退要求に對し支那外交部は二十日の新聞紙上に聲明を發表せるが其の大要次の如し。

「日本今回的要求は意想外に不等なるものにして中國人民に重大なる脅威を與ふるのみならず實に聯盟の權威及不戰條約、九國條約等の尊嚴に對し直接挑戦するものなり此種要求は實に中國の主權及國家の人格を危ふからしむるものにして地方當局は如何に流血を避けんとする誠意を有するも絶對に承認することを得ず日本軍隊は多數の援兵と最新式の武器とに依り更に大規模の攻撃を加へんとし一切の和平運動に耳を籍さず只戰爭せんことを決心し居るを以て上海に在る中國軍は領土を守る爲

已むを得ず飽く迄奮闘するのみ」

上海戰局の進展に拘らず支那新聞の虛偽報道は依然として止まず、「日本は日露戰爭後二十六年を經たる今日に於ては既に當時の老兵を失ひ現在の新兵は經驗なき爲戰鬪力に限りある處百戰を經たる十九路軍の如きは一を以て十に當り得べし」と、洛陽國民政府記念週に於て李烈鈞の述べたるを大々的に掲載し、或は「日本軍の死傷既に一萬に達し新に三師團増援に決したり」「傲慢なる日本軍も今回の連敗に依り破れたる張子の虎の如く威信地に落ちたり」等と殆んど連日に亘りて掲載す。十九路軍に對し各團隊及個人より義捐金、慰問品、麻袋、足鞋等を同軍駐京辦事所に寄贈するもの相當あるも、主として右の虛報により十九路軍の大捷を信ずるに原因する處大なり。新聞紙の虛報逆宣傳は前記せる如く猛烈なるも、支那當局にて事件の南京に波及するを極度に虞れて極めて嚴重なる取締を行ひ居る爲目下市内は先づ平穏なり。

蘇洲

蘇州は滬寧線にて上海迄僅に二時間行程の近距離に在り、上海に發生する事件は直

に反響するを例とし一月下旬既に種々の謠言流布し或は「太湖方面の土匪と日人相呼應し京漢鐵道破壊の機に乗じ暴動惹起の企あり」或は「既に日本浪人は上海より變裝して蘇州日本租界に潜入し居れり」等誠しやかに傳へられ、二十三日夜の如きは臨時戒嚴令を布き軍隊を以て特に停車場附近を警戒せしが、更に「日本は上海を武力占領すべし」との説傳はるに至り駐屯中の第六十師々長は水陸兩面の聯合警備を直に實行するに至れり、只幸にも市民の對日空氣は左迄惡化の兆なかりしも我海軍警備力の及ばざる場所柄とて事態の急變を慮りて先づ婦女子を引揚げたるが、上海にて日支兩軍の衝突發生するや、四圍の情況忽ち惡化し邦人の在住不安となり、引揚げに決せるも上海への引揚は不可能となり、南京方面への引揚も危険を豫想せらるゝに至りしかば、總々南京より我領事館員二名南京憲兵司令部高級副官及憲兵四名を伴ふて出迎へ二月六日領事館員及邦人全部無事鎮江に引揚を了せり。

杭州

一月中旬より人心漸次動搖し謠言盛に行はる。市當局は武装巡警及保安隊を派して

我領事館及租界を保護せしも杭州駐屯軍の續々上海方面に出動する關係もありて情況不穩の兆を見る。而して杭州は我海軍警備力の及ばざる土地柄なるに鑑み、一月廿八日居留民全部を上海に引揚げ領事館員五名のみ尙殘留せり。然るに廿八日深夜上海事件發生するや翌日より支那保安隊は領事館の四周を嚴重に包囲したるのみならず、銃口を擯して館員の外出を阻止せる爲館員は全然監禁狀態に陥り引揚げも許されざる有様となれり。

領事は右情況を南京上海に打電して兩地支那官憲に交渉を依頼せるも容易に情況緩和せられず、因却中の折柄五日午前市政府より六日杭州發自動車にて南京に送り届くる旨の通知あり、翌六日領事以下館員領事館を出でんとするや又復保安隊に阻止せられしも市政府に交渉、市吏員の出迎によりて漸く市政府に到り、市長斡旋により市吏員及憲兵の護衛下に南京に引揚げ得たり。

杭州に於ては市長を始め市政府は大體領事館に對し終始好意を示し居りたるが、同領事館を封鎖し引揚を阻止したるは日本飛行機の杭州飛來爆擊說宣傳せられ居りし際

とて之を避くる爲一種の人質として留置きたるものならんと。

二四

蘇 湖

一月三十日情勢の急變を慮りて領事館事務所と日清汽船「ハルク」に移轉せしが、一月二日危険と認め邦人二名を除く外在留民の全部約五十名及領事館員は豊浦丸にて軍艦護衛の下に下江す。領事館員は一應上海に寄港の上爾後の行動を定めんとせるに、時恰も我海軍と吳淞砲臺交戦中危険甚だしかりしを以て上海寄港を取止め内地に直航せり。

九 江

上海事件發生の報を受け領事館より在留邦人に對し引揚準備を命じ、尙突發事故を懸念し廿八日夜は婦女子を日清汽船「ハルク」に收容の上警備軍艦より兵員を派遣して警戒せしむ。

支那新聞は大なる見出を付して上海事件に關する誇張的報道虛報を上海電報として掲載せしも反響餘り大ならず、然るに二月二日南京砲擊の入報するや俄に形勢不良事

態容易ならざるを示せるに依り、二月四日「ハルク」避難中の婦女子を警備艦に收容し、男子を「ハルク」に集合乗船の都合付き次第領事館員以外の居留民全部を漢口に引揚げんとせり。

當時市内には流言蜚語盛に行はれ、支那當局者も之が取締に苦心中なりし際なれば、俄に日本居留民全部九江を引揚ぐることあらんか謠言更に簇出其の結果年闘を控へて民心洶々たるの際椿事の勃發必然なりと支那當局より暫く引揚方見合す様懇願あり、一方市内も逐日平靜となり不穏の兆去りしかば、邦人も一時引揚げを中止し二月五日婦女子を日清汽船「ハルク」に男子を同汽船に移せり。

其後市情一層緩和せる爲引揚げを見合すことゝせるも、尙在留民は日清汽船事務所「ハルク」に收容中にして情況此の儘に推移せば、三月早々邦人は自宅に歸還し得るに至るべし。尤も二月中邦人十名丈引揚げたり。

大 治

平穡。

二五

上海事件に關する報道は、殆んど全部南京上海よりの支那通信に據る爲他の支那各地と同様虛報誇張にて充滿し殊に事件發生直後に於ては「日本陸戰隊敗戦の結果全部歸艦し軍艦數隻は既に日本に引揚げたり日本敗退の結果英米領事に泣付きて調停を依頼せり」「日本陸戰隊と英米軍との間に衝突越り激戦中」等を大々的に報ぜるが武漢日報の如きは上海特電として「日人の殘忍斯の如し」と題し、日本陸戰隊は卅一日朝北四川路虹口大旅舍附近にて銃聲起るや同旅舍より發射せるものなりと稱し、四百餘名の止宿人を全部捕縛して引摺出し或は銃殺し或は切捨て道路及海寧路一帶を血の海と化せりと全然無根の虚を眞しやかに傳へ、更に日本軍の殘虐なる支那人虐殺振りの一例として支那紅十字會員（日本赤十字會員に相當す）の目撲せる所に依れば、數名の支那婦人は驚くべき凌辱的方法を以て殺害せられ（具體的に記述しあり）日本軍の警備區域は死屍累々流血地に遍しと虛報を以て日本軍を誣ひ民族的反感を煽るに努めたる。

又吳淞砲臺砲擊後に於ては各新聞共日本軍艦吳淞を砲擊せる爲支那軍も自衛上之に應戦し、日本驅逐艦一隻を擊沈し巡洋艦三隻驅逐艦一隻を擊破せりとの南京電報を掲載せり。

一般民衆は表面平穏なるも次第に不穏の兆を呈せんとす氣配あり、抗日會は我總領事の強硬なる要求に餘儀なく當局より解散を命じたるも、名を商工界救國會と換へ依然として排日貨と繼續せんと蠢動しつゝあり。

從來湖北、江南、安徽各省に亘りて跳梁せる共產軍は、昨夏の大洪水減水するや次第に活躍の度を高めて武漢に肉迫せんとする勢あり、漢口當局者は此共產軍討伐に困惑せる折柄とて今回の上海事變の漢口に波及するを極度に虞れ、全力を盡して警戒に努めつゝあるも漸次對日感情の惡化するを遏ぐ能はず、加之本年は減水特に甚しく殆んど孤立無援の状況なる爲在留邦人の不安も少なからざるに鑑み、上海事件直後には在泊警備艦より警戒隊を出し租界四周には鐵條網を展張し尙要所には土蔵を構築して萬一に備へたるが、其後上海より若干の特別陸戰隊を派遣せり。

租界外居住の婦女子は全部租界内に引揚げ一般居留民も引揚げ準備を完成しあり。二月二日武穴へ麻買出しの爲出張中なりし邦人十一名（全部）漢口に引揚げ來り在留婦女子の一部は下航引揚げたり。

目下各支那新聞紙は例の通り、支那軍に有利なる上海戰報を虛報と取混ぜ満載し居れ共、支那民衆に與ふる刺戟は稍薄らぎたる模様なり。

沙 市

上海事件發生後も比較的平穏なりしが在泊中の我警備艦出港し當分來泊せざることと決定せる爲、二月二日領事館員居留民共全部宜昌に避難す。

宣 昌

狀況一般に平穏謠言行はれしも支那當局者は極力事故の發生防止に努力を惜まず、上海事件發生の報ありし翌二十九日以來婦女子を日清汽船事務所に收容して警戒中なりし處二月十四日各自歸宅せり。

其後引續き平穏。

長 沙

揚子江本流と同様湘江は本年減水特に甚だしく、警備艦は三叉磯（日本領事館より下流約三浬）より移動し得ざる狀況にて、交通不便の爲居留民は不安に驅られ居りし折柄、上海事件發生し支那新聞紙は他の各地と同様盛に誇大且虚偽の電報を掲載せり。而して滿洲事件當時は常に支那側の被害甚大なるを誇張して悲觀的報道に專念せる漢字紙は、今回の上海事件に關しては支那軍大勝を博し戰勢支那に有利に發展しつゝありとの宣傳を滿載せる爲か、對日感情は表面的に變化なく市中平穏なりしが二月二日南京發砲事件の入報あり。

元來排外思想強く且つ敵愾心に富む湖南人は上海事件に次ぎ南京發砲事件の入報にて何時激發するやを計り得ざる爲、三日には我領事館用品及居留民の重なる手廻品を日清汽船會社「ライター」に積載し、居留民も同社「ハルク」附近に集合、何時いても事故發生せば小蒸氣船にて曳航避難の準備を完成せり。然れども支那當局者も上海事件の波及して當地に擾亂の起るを極度に虞れ、取締を特に嚴重にせる爲其後別段の

事故も起らず不穏の兆と認ひるものもなく、且一月中旬より湘江も増水して警備艦の行動も自由となりしと以て在留民も安心非常引揚準備を復舊せり。

只漢字紙は依然連日日本軍隊慘敗の誇張捏造記事を以て紙面を埋め、我陸軍派遣以來特に其の傾向甚しく例へば廿四日の各紙は一齊に「二十二日廟行鎮、江灣鎮の戦闘に於て日本軍總崩れとなり戦死者約五千人を出し支那軍は装甲車二輛重砲二十八門野砲三門機關銃二十七挺小銃約一萬一千挺を歴獲し「タンク」八輛を破壊し飛行機二基を射落し空前の大勝を博したり」と掲げたり。一般市民は多少の割引はしつゝ大體に於て此種報道を信用する状況なるも目下の處市内は平靜を持続しつゝあり。

三、南支方面

福州

一月二日福州西湖公園に於て各中等學校生徒の反日游行あり、視察の爲同公園に赴きし我總領事と同行せる警備艦長及同艦砲術長に對し群集暴行して負傷せしめたる事

件あり、二月四日福州市内日本小學校々舍内宿舎に支那人二名押入り同校訓導水戸三雄及同人妻を慘殺したる事件あり、更に同夜日本總領事館警察官宿舎、臺灣公會の二ヶ所に放火せるものあり幸ひ大事に至らずして發見消火せる事件あり。

我總領事は右の事件に關し嚴重交渉中なりし處、一月十日には漢字紙新潮日報、東方日報（省黨部系にして排日新聞なり）は不敬記事を掲載せるありしかば一層嚴重に交渉の結果、陳謝、犯人捕縛嚴罰、責任者處罰、吊慰金提出、反日會解散、反日集合游行演説禁止、反日「ボスター」撤廢等我要求全部を承認して一月中旬解決し、其の後支那當局の辛辣なる取締により反日會の工作も殆んど停止せり。

上海事件發生の報ありし後も、市内一般に格別の變化を認めず比較的平穏なりしも福州は警備艦の在泊する馬尾より約十二浬上流に在り、只一隻の特務艇福州に在泊するのみにて聯絡不便海軍力に依る保護も困難少からざるに鑑み、萬一の場合を顧慮して二月一日夕刻より在留婦女子の避難收容を開始し二月二、三日に亘り約五七〇名を臺灣に引揚げたり。

元來福州は上海と經濟上緊密なる關係あり、上海事件の爲舊年關に際し上海よりの賣掛金回収不能に陥りたる爲、平常反日運動を喜ばざる商人間にも漸次險惡なる風潮顯はれ、且續々来る上海避難民の反日侮日的言動と相俟ち對日感情惡化の兆あり、加之各漢字紙は盛に上海方面の支那軍の大勝を報ずる虛報を滿載するありて一層對日惡感情を煽り、通行中の邦人に對し「日本人の泣面を見よ」等の惡罵を浴せ小石を投げ睡を吐き駆け人力車乗車を妨害する等の小事故を頻發せしかば、殘留の邦人を夜間我警備艦に近き河岸の臺灣銀行支店外一ヶ所に集合宿泊せしめ兵員十數名を以て之を警戒せしめたり。

漢字紙の上海戰況に關する虛報は他の各地と同様にして、捏造虛妄驚くべきものあり。而も毎日之を連載する爲一般市民の感情を更に激化するの掛念ある故我總領事は支那當局に嚴重に警告する處あり、而して當地支那當局は西湖事件、水戸訓導慘殺事件、不敬記事等にて恐惑中なり、又官民共に上海の轍を踏まざる様苦心中にして當局は市民の暴舉を阻む爲特に邦人住居區に巡警派出所三ヶ所見張所二十ヶ所を新設し、

極力治安維持に努力中なりしを以て各漢字紙に内訓する所あり、之が爲か各紙共に多少曲筆を改めたる處あるも虛報の連載依然たり。

只一般市民は漸次平穏に歸り久しく杜絶しありし臺灣向木材の積出をも見るに至れり。

■ ■ ■

上海事件發生するや各支那紙は大見出を附し殆んど全紙面を費して報道せり、從來各紙共滿洲事件に關しては比較的地味なる報道振なりしに反し、上海事件には「我軍大撃敵の死傷千人以上日軍の司令部を占領す敵の飛行機五基を射落しタンク四臺を捕獲せり」等虛報捏造と並べ且各紙共筆鋒を同じくして大に煽動的社説を掲載せり。

右の如き報道連日に亘りたる爲、一般市民も支那軍大勝を妄信し人心動搖漸次對日感情惡化の兆を見るに至れり。

二月二日南京砲擊の報到るや各紙の論調更に猛烈となりしも獨り全閩日報は正確なる報道に努めたりし結果、多少市中の戰勝氣分下火となり平常に復したる形勢となり

しも別に日本軍の廈門占領謠言新に流布して市民の恐怖を惹起せり。

支那當局者は極力治安の維持を計り、謠言の芟除に努めしも流言蜚語は皆に支那民衆のみならず在留外人にも影響し、二月初旬には外人間に於てすら日本軍廈門占領説と信用する向を出せるを以て、我領事館より之等謠言取締を一層嚴重にする様警告する所ありたり。

二月八日我陸軍海上上陸の報道到りしも時恰も舊正月に當り且つ謠言も漸く四散せる際とて格別に市民の感情を昂むるに至らざりき。

其の後各新聞は引續き上海方面の報道を滿載し、不相變支那軍の大勝利を傳へしも一般市民は全閩日報の所報もある關係上當初の如く熱狂せず、相當の疑問と割引を附して之を読みつゝありしが餘りにも連日に亘る大勝利報にて次第に上海に於ては支那軍實際に勝利を占めつゝありと過信するに至り、一般人氣は再び悪化の傾向を生じ曹く鳴を鎮め居りし抗日會も亦活動を開始し、一般市民に更に新なる衝動を與へつゝあり。

支那新聞紙の戰勝報道は虛報捏造殆んど想像も及ばざるものあるは他の各地と略同様なり。試に廈門に於ける二三の例を擧ぐれば、「開戦三日にして日軍全滅せり」、「日軍既に鬪志なく六百名は兵變を起して本國に送還せらるゝ事となりしが右は吳淞港を出づると同時に海中に投ぜらるゝ筈なり」等荒唐無稽の報道を麗々しく掲げ、二月廿三日夕刻には「上海にて十九路軍大勝日本軍全滅せり」との報到着せりとて各社は之を大書して市内各所に張出し、廈門大學生は約十輛の自動車に分乗し其の他の學生は隊伍を組み夫々手分けして市内の宣傳に努め、同時に祝勝の爆竹を鳴らす様勧誘して廻りたる結果、夜に入りて廈門島及鼓浪嶼共支那人一齊に騒ぎ出し町は人山を築き爆竹は至る所耳を聾せん許にて物凄き光景を顯出せり。

更に廿四日の各紙は次の如き報道を掲載せり。

- (一) 日軍三萬餘江濱を總攻撃したるが計略に乘り全部崩壊す
- (二) 廟行鎮に於て我軍敵三千を斃し死屍地に充つ
- (三) 吳淞の敵總退却軍を爲さず

(四) 植田の國人に對する報告も慘敗を承認し居れり

(五) 日軍總崩れ江濱、吳淞、閘北數ヶ所に包囲せられ武裝解除中

(六) 勝利は終に吾等に歸す日軍の死傷數最高記錄を破る

(七) 吳淞の敵全部武裝解除せらる

(八) 敵軍遁げて及ばず白旗を立てゝ降伏す

右の如き支那軍勝利の報道連日に亘る爲、人心一層硬化對日感情尖銳となり抗日會も活躍の度を加へ「コロンス」に於ても各學校各團體を網羅して鼓浪嶼抗日救國會を新に組織する等目下油斷を許さざる状況なり。

汕頭

一月十日漢字新聞汕報に不敬記事あり、更に十二日の紙上にも引續き邦人の默視しえざる暴論を掲げ、我領事より再三嚴重に抗議する處ありしも容易に解決せず、一月末上海事件發生するや虛報誇張的報道及對日宣戰布告の號外等の出るあり、又駐屯中の獨立第二師は市内及各要所に防備を構へて砲を据ふる等露骨なる對敵準備をなせる

爲情勢險惡となり、日本海軍と支那軍の衝突汕頭にも發生するにあらざるやの懸念より、上流家庭の續々香港或は潮州等奥地に避難を開始し、其の數三千に達すと稱せられ、在留外人迄多少謠言に惑はざるゝ傾向を見るに至りしにより、在留邦人婦女子も引揚準備を完成して便船を待つに至れり。二月五日不敬記事の取消及陳謝文を汕報紙上に掲載解決の結果市情多少鎮靜となる。

二月八日在留邦人及籍民婦女子の一部内地及臺灣に引揚ぐるや、之に對し又謠言を生じ更に十一日には港口に水雷を敷設せるを以て商船の入出港時間を制限し、又港外の燈臺を一律に消燈する旨の告示出で、且獨立第二師の益々露骨なる對日戰闘準備、各漢字紙上に掲げらるゝ上海十九路軍の大勝利報等にて一般市民の對日態度も侮日的となり、獨立第二師の如きは十二日前後より日本領事館の東方約八百米の高地に塹壕を構築する等の示威を行ひ、邦人使用支那人を壓迫し更に邦人に對しても不穏の舉動を示すものあるに至れり。

二月廿四日午後四時過獨立第二師は突如上海に於ける十九路軍大勝を市中に報じ、

自動車にて爆竹を鳴らしつゝ市内を疾駆市民に爆竹の打上げを許容したる爲、忽ち全市一齊に爆聲盛に起り市民は熱狂し自動車に樂隊を乗せて押し廻り、同六時過迄全市は數々たる爆竹の音響を續けたり、市公安局は警戒を嚴にし極力保安に努めたるも遂に此騒ぎ中邦人二名群集に殴打せられたり。

其の後に到り右爆竹騒ぎは獨立第二師の市商總會に軍費を支出せしむる爲に行へる一策なりしこと市中に傳へられ、市民の態度も漸次安定に向ひつゝあるも他處に避難せる市民は尙歸來せず目下市人口は從前の約三分の一を減ぜりと。

廣

東

一月中旬に起りたる共和報の不敬記事々件は廣東市長の懇請を容れて無事解決せるも、下旬に入るや從前よりの排日記事は益々増加し且論調激化の感あり、虛報、宣傳的捏造記事の掲載せらるゝこと他の各地支那新聞と異らず。

廿三日市内各紙は上海電として「日軍は三ヶ月内に中國を完全に占領すべし」との大見出を附し「犬養首相の上奏文」として

(一) 支那匪軍解決問題

(二) 滿洲政體問題

(三) 滿洲鐵道問題

(四) 財政問題

等數項に亘る政策に關し「聯盟は顧慮するに足らずとも米、露兩國の干涉は恐るべきものあるに付何分の御詫を相仰ぎ度く、又支那政府は恐るゝに足らず、支那領土は三ヶ月内に完全に占領し得ることは臣等敢て之を斷定す、又全國に亘る排日運動は表面輕視すべからざる如きも事實は然らず、醒め易き支那人の國民性に乘じ無智なる軍閥を利用し更に利を以て之を誘へば之が制止困難に非ざる」旨上奏せりと報ぜり。

一月廿八日上海事件發生するや各支那新聞紙は此の報道に紙面の大部分を埋め「十九路軍は日本海軍に對し廿四時間内に上海撤退方を要求せり」等種々の虛報を掲載し「鐵血を以て國土を守衛せよ」等の論說を掲げたるも一般市民は未だ事件の真相を詳かにせず、從て左したる動搖あるを認めざりしも上海に於て我陸戰隊に對峙中の十九

路軍は殆ど全部廣東人なる關係もありて反日空氣は益々濃厚ならんとする氣配あり、三十日の各紙には在粵中央委員の連名にて中央宛「軟弱外交政策を棄て十九路軍を援け、決定的に抗日せられなし」と電請し又十九路軍宛激励電報を發せる旨を掲載せり

一月三十日十九路軍に對し軍費として五十萬元を送金す。

二月に入りて謠言更に盛となり「日本は遂に廣東をも襲ふべし」とか「其の隙に乗じて共產黨襲來すべし」等流布し民心次第に不安の徵あり、在留外國人も執拗なる虛報、逆宣傳に多少迷はされんとする風あるに至れり。

三十一日四圍の形勢漸次惡化の兆あるを認め支那町居住の邦人全部を沙面に移轉せしめ、尙ほ何時にも引揚げ得る準備を整へたり。

一日在留婦女子の一部十六名香港に引揚ぐ。

謠言盛となりて市民も著しく神經過敏となり、富豪連は多く逃仕度を急ぎ居る一方當局要人連にも大動搖を來たし日本兵今にも廣東方面へも進撃し来るやの風説を立て

風聲鶴唳自らの謠言に脅へ爲に抗日會も三十一日市黨部の注意により自動的に活動を

停止することに決定し、反日的「ボスター」の頒布等も停止するに至りハ排日氣運緩和の傾向を生じ抗日運動開始以來回収不能となり居りし支那商人に對する賣掛代金の如きも俄に先方より自發的に支拂ふ現象を呈せり。

然れども支那新聞紙の虛報は依然たるものあり「鹽澤司令官の自殺」「中國軍大勝」等途方もなき消息傳へらるゝありて全市を擧げて祝勝花火を打揚ぐる騒ぎを演出せり一月十日丁紀餘の率ゆる第二航空中隊所屬戰闘機六機上海戰場に向ふと稱して廣東發北上す。

我陸軍の上海に出動するや各紙は「今次出動の日本陸軍は海軍よりも一層弱し」等種々の宣傳をなし、依然十九路軍の大勝を報道せる爲軍人民衆は右を眞に受けて增長し日本軍恐るゝに足らずと豪語するものあり、頑迷なる軍人は今にも上海に出陣せんと用意せるものを生ずる等毎日感情を漸加せんとす。

一月十四日十九路軍に對し更に二十六萬元を送附す。

支那新聞紙の虛報、逆宣傳は日を経るに従つて益々猛烈となり、殆んど底止する所

なく十二日の各漢字紙は「事變以來二月八日迄の日本軍の損害統計」と題し、上海發特電として「墜落及捕獲せられたる飛行機二十基、捕獲せられたる「タンク」六輛他に擊破せられたるもの一輛、擊沈せられたる軍艦三隻他に擊破せられたるもの數隻死傷七千餘体、數百名、鹵獲せられたる步銃三千挺、彈薬二百餘箱、大砲十餘門、機銃二十餘挺に達す」と報道し、十六日夜の如きは「日本軍は英租界に逃竄し、英國軍の爲七千餘名武装を解除せられ、英、米、佛三国は武力を以て日本の行動を制止し居るに付最早や戦闘なかるべき」旨及「植田司令官生捕れたり」等の上海電に動かされ、黨政各機關各種團體先づ自動車を駆つて爆竹を鳴らしつゝ市中を練り歩き、沿道住民亦之に呼應し凡そ四五時に亘り全市は爆音に震動し、市民は御祭り騒ぎに狂奔し交通の支障を來し治安維持にも不安を生ずる程度となりたるを以て、公安局に於ては狼狽し窮屈の策として「中國軍目下苦戦中なり」との偽電を作り、公安分局に掲示せしめ辛じて人心を安靜ならしめたる出來事あり。漢字紙の論調も自然日に増し無稽の消息を基として煽惑の筆を弄し、十七日の市政日報は「日本の末日到らんとす」と題し「中國軍人は

此戰勝の餘威に乘じ日本を乗取るべく時機或は至らざれば永久經濟絶交を行ふべし、今後日本が如何に讓歩し憐みを請ふとも飽く迄經濟絶交を續け彼をして蘇生の餘地なからしむべし云々」と説述せり。

支那軍大勝利の虛報に熱狂せる市民は十七日市民自治促進會主催の下に「援助十九路軍抗日救國大會」を開催、各界民衆數千名參集して大に氣勢を擧げ國民政府に對し

(イ) 十九路軍を援助すること

(ロ) 張學良、馮玉祥、閻錫山等をして關外に出兵夫地を回復せしむることの發令方請願すること等を議決し、十九路軍宛激励電報を發出して解散せり。

十九日の漢字紙は更に筆法を變へ「米國總領事館より出でたる消息」なりとて「米國政府は上海の戰局益々激甚となり當地米國總領事も日本軍の爲侮辱を蒙るに至りたるに付、愈々比律賓艦隊に對し二十時間内に上海へ向け出動方命すると共に、艦隊司令官に對し若し日本軍が米國の利益を侵害する場合には断乎たる措置に出づべしと命令せる」旨の虛構記事を掲載して米國總領事より抗議を受け、二十一日の各紙は「江

日本軍司令部を包囲攻撃して敵三千餘を殲滅せし」と虚報し、二十三日には「又復
支那方面にて我軍反撃して全勝敵千餘名の内過半を殲滅せしめ軍艦一隻を擊沈二隻を
撃破、飛行機一基を射落す」等を虚報したる外、市上空を飛行せる飛行機は「上海日
軍全滅我軍虹口公園を占領す」との號外を散布し廿五日各紙は依然支那軍の優勢なる
を特筆大書したる外、廿四日上海及東京特電として日本は廿三日閣議に依り三ヶ師増
派に決し菱刈大將を總司令官とせる旨を報道し、尙次の記事を掲載せり「上海在住廣
東人の避難民千數百名著廣し市社會局を初め市内の慈善團體に於て救濟し居り又上海
の日本軍は廣東人のみを逮捕銃殺し居れり」又日本軍敗戦の原因として、

- (イ) 日本國內に於て主戰派が各方面の攻撃を受け居ること
- (ロ) 國際輿論が不利なること
- (ハ) 徵兵制度の爲中產階級が多く戰争を欲せざること
- (ニ) 實戰の經驗なきこと

等を記載せり。

支那新紙の虛報、煽動概ね右の如くなれども、二月末に到りては我陸軍の增援傳へ
られ、更に日時の經過と共に十九路軍の敗退相當に信ぜらるゝに至り、尙政府當局も
餘りに虛報誇大なる記事の民衆に及ぼす影響を虞りて内々新聞社に内訓せるあり、又
十六日夜の戰勝報の如きは射利の爲盛に妄動中の一通信社が爆竹業者と結託して大勝
利報を流布し、市民の熱狂に乗じて廿餘萬元の爆竹を消費せしめて巨利を博せる等の
事實判明せる爲市民の熱も多少下降せる傾向を見る。然れども元來極端なる排他心を
有し、且つ支那人中の先覺者と自負する廣東人なれば排日、侮日は日を追ふて昂ぜん
とする模様にて何時事件の突發するやを豫想し得ず、居留民中の婦女子は三月に入り
て早速引揚ぐべく其他の殘留民も引揚準備を完成して事件の成行注視中なり。

香港

英國官憲の取締嚴重にして何等事故なし。只支那人間には種々の虛報を妄信して排
日侮日の感情昂まり、外人間にも上海事件の解決遲延につれ主として商取引の關係上
より怨嗟の聲あるも何れも表面化するに至らず一般に平穏なり。

より懲懾の輕あらと胸をひきしめする所至の、一絲の不穢でも。

打谷日は大抵最も多く、長大間がるは連作地の耕作經營のほんとうの面積である。其の外の畠の耕種は東洋式のアーチカルの面積である。又支那人の耕種は耕種の面積を支那土の耕種と呼ぶ。

今早農作地ノハノ其地の耕種方法は機械耕種と手耕作の耕種の中爲る。手耕作の耕種は其地の耕種の実験である所の施設の耕作、機械耕種の耕作は半方三田の耕作である。且々支那人中の農業家は自身で公認東人本邦耕種者、納稅耕種者、耕入の農業者事務課地主の農業者、本邦生業者、本邦向文見者、新規者を支那耕種ある耕種者、株式会社者とも、支那の耕種者、母國耕種者、本邦農業の耕種者、耕種者とも、且日本耕種の耕種者とも、十六日等の耕種地の時も支那耕種の耕種方法中の一耕種地を經營する者等つゝ大通者、支那耕種大通の耕種の經營者、耕種者、經營者、内之耕種地の耕種者とも、又支那、支那自家の耕種者、本邦耕種の耕種地主の耕種者とも、支那耕種の耕種者、支那耕種の耕種、耕種地の耕種の時ノ下れる所、二日未だ耕種者、支那耕種の耕種者、

